

大通公園の風物詩

トウキビ売り

明治のころ、平岸村の農家がトウキビを焼いて街角で売り歩いたのが、始まりといわれています。その後、市内各地に広がって札幌の名物となり、石川啄木が短歌の題材にするほどになりました。

昭和三十年代、大通が市民の憩いの場としてにぎわい出すと、トウキビ売りをはじめ、各種の屋台が軒を並べました。ところが、屋台が増えるとともに、公衆衛生や道路通行の問題が後を絶たず、四十一年、大通から屋台が全面撤去されました。

しかし、札幌名物のトウキビ売りを惜しむ声が強くなり、四十二年、札幌観光協会が運営再開に乗り出しました。従来の屋台のイメージを一新するため、カラフルなボックスワゴンと紺色の制服で統一しました。当時の値段は、焼きが四十円、ゆでが三十五円でした。生まれ変わったトウキビワゴンは、清潔で安心して買えるなど好評を博し、売り上げも年々増

加していき
ました。最
高記録は、

四十八年で

約九十三万

本も売りに上

げました。

盛況につけ

込み、無許

可で販売す

るワゴンが

現れます

が、五十五年、都市公園法が適用になり、無許可の営業は禁止されました。

こうして、百年の間、人々から親しまれてきた「トウキビ売り」。今年もまた大通公園の風物詩として、四月末から十月いっぱいまで、昔と変わらぬ香ばしいにおいで出迎えてくれます。

「しんとして 幅広い街の 秋の夜の 玉蜀黍の
焼くるにほひよ」

石川 啄木

(平成十五年八月号 第九十一回)



昭和35年当時のトウキビ売り
(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)